



一宮川の夕景

## 別荘地「東の大磯」としての発展

### —明治から昭和前期

明治時代から昭和の前期にかけて、海に面して温暖な一宮は各界名士の保養地・別荘地として発展し、大正初期には100軒以上の別荘が立ち並びました。これは一宮の近代における特筆すべき現象です。

明治7年に県内第6位の人口を有した一宮本郷村は、23年に一宮町となりました。29年には房総鉄道が千葉・大網間に開通し、30年に一宮まで延長されました。明治22・23年頃から、一宮海岸に来訪者の姿がみられ、鉄道開通後、東京方面からの避暑客が増加したといわれます。

最も古い別荘は、明治34年に後の首相・斉藤実氏が新地に築いた別荘だといわれていますが、一宮の別荘地としての発展には、旧藩主・加納久宜公の力も預かっていたとされます。貴族院議員の加納久宜公は、明治39年から41年まで町長をつとめた中村祐吉郎に諮って、一宮の海水浴場地としての発展の可能性を探らせました。そして、神奈川県の大磯を範として、財界の名士を招くことから始めることとなり、三井財閥の三井八郎次郎に請うて別荘を設営せしめました。この別荘に過ごした三井氏の子息が、健康を回復したことから、一宮の保養地としての評判が高くなったといわれます。加納公自身も海岸近くの竜宮に別荘を設けて、紹介につとめました。また、加納氏が鹿児島県知事をつとめたところから、薩摩方面の軍人が多

く来訪したといわれます。

地域的には、一宮川の中の橋から下流の兩岸、現在の船頭給・海岸・新地・十六区あたりの、一宮川及び海岸に近いところが最大の区域でした。こちらは、一宮川の水上交通で町に出るのが容易であり、また川遊びなども魅力であったようです。また、八区老女子がもうひとつの地域でしたが、こちらは市街地から山懐に入った地区です。その他、宮原・追手などにも散在していました。

来訪した名士は政・財・官・軍・学の各界にわたり、一時は、総理大臣斉藤実、枢密院議長平沼騏一郎、陸軍元帥上原勇作、衆議院議長秋田清など、国政枢要の人物が一堂に会したこともあったといわれます。地元では、一宮川のほとりで組閣が行われたのだ、とする言い伝えもあります。

そのほかにも、加藤友三郎首相一宮商業高校創始者の志田鉦太郎、明治大学総長、伊達伯爵（仙台侯）、山内侯爵（土佐侯）、南部侯爵（盛岡侯）、佐竹侯爵（久保田侯）などの名士の別荘がありました。また、来訪者は、一宮館に逗留したことで知られる芥川龍之介をはじめ、東郷平八郎元帥、徳川慶喜公、小説家の尾崎紅葉などが挙げられます。

こうした別荘地としての発展は、サービス業の発展と表裏していました。大正10年頃から町内や一宮川沿いに料理屋が増え、「茶屋遊び」と称せられて賑わったと



昭和初期の一宮川周辺の賑わい

いわれます。また昭和初期にはカフェーが市街地の駅前通りに現れて県下有数の数を誇ったといえます。しかしその後、盧溝橋事件以降の戦時体制への突入と、戦後の土地財産制度の変革により、一宮町の別荘のほとんどが無くなってしまいました。その結果、現在ではたとえば中の橋のほとりにある平沼騏一郎邸の離れなど、わずかな名残を残すだけとなりました。